

I 港町の成立と発展

1 港町尾道の成立

尾道という名前はいつ頃から使われていたのでしょうか。平安時代中期、永保元年（1081）に西國寺が再建されたとされる『西國寺文書』に尾道浦という記述がでできます。この頃の尾道浦は、まだ港町ではなく、海辺にそった小さな集落であったと考えられます。

その集落が瀬戸内海を代表する港町へと発展する契機となったことは、嘉応元年（1169）に備後国大田庄倉敷地に公認されたことによります。平安時代には、広大な世羅台地に広がる大田庄は、栄華を誇った平氏の領地となっていました。そこで作られた年貢米を京の都へ積み出す倉敷地（港）がありませんでした。そこで、大田庄から近く、天然の良港として機能を備えていた尾道を大田庄の倉敷地とするよう、嘆願がだされたのです。

これが認められ、港町尾道が成立し、その後急速に発展していくこととなります。平家から後白河院に寄進された尾道は、さらに文治2年（1186）に大田庄が高野山領として寄進されたことに伴い、同じく高野山領に編入されました。その後の文永7年（1270）には、『高野山文書』によれば、港町尾道に入港する船舶から、津料（関税）を徴収していたことも分かっており、独立した港町であったことをうかがい知ることができます。

また、寛元3年（1245）には、高野山から大田庄預所として、淵信が派遣され、尾道に住み、年貢米の管理と輸送にあたったとされています。弘安9年（1286）には、高野山から浄土寺と曼荼羅寺（現海龍寺）の別当職を与えられており、その後、浄土寺は定証上人により、伽藍が再建され、嘉元4年（1306）に落慶法要が営まれています。

こうして、14世紀初めには、有力者も存在し、港町として大きく発展を遂げています。



2 港町の歴史を探る

平安時代末に成立した港町尾道は、様々な有力者に庇護を受けながらも、問丸・梶取といった海運業者や商人たちにより、瀬戸内海を代表する港町へと変貌と遂げました。では、その発展の過程を知ることはできないのでしょうか。古文書では寺院や政治についての記述がほとんどで、どのように港町が発展したのか、人々はどのように生活していたのかを知るてがかりは、あまりありません。そうした港町の発展過程や生活の様子を知ることができるものとして、遺跡の発掘調査があります。

港町尾道は、840年以上の歴史を誇り、その長い歴史の積み重ねのうえに、現在の尾道があると言えます。実際に現在の旧市街地の地下には、港町の遺構が堆積しており、尾道遺跡と呼ばれています。

尾道遺跡は、故土屋隆氏らによって発見され、昭和50年に第1次調査が実施されました。その調査では、室町時代の生活面が何層にもわたって、積み重なっていることが確認され、また、中国の元時代に作られた、枢府窯製白磁碗が出土し、港町の繁栄ぶりがうかがわれます。

その後も、市街地の開発に伴い、発掘調査が実施され、現在までに190回を超える調査が行われています。ただし、奥行きに比べて間口の狭い敷地での調査が多く、調査面積も10㎡に満たない場合がほとんどであるため、約37.3haと推定されてきた尾道遺跡の面積に対して約1%の面積しか調査できていないのが現状です。そうした中でも、様々な遺構や豊富な出土遺物により、港町の形成過程が少しずつ解明されつつあります。次に尾道遺跡の発掘調査について、ご紹介します。



尾道遺跡の土層断面



尾道遺跡全景

3 尾道遺跡の発掘調査

尾道遺跡第1次調査（昭和50年 BC01地点）

何層もの生活面が積み重なり、建物の柱穴や貯蔵用あるいはごみ廃棄用の土坑が複数確認されています。建物は何度も建て替えられ、整地されていた様子が分かります。



建物跡



建物跡

この調査では、中国製の青磁・白磁、朝鮮半島製の青磁、土師質土器と呼ばれる素焼きの皿・碗、備前焼（現岡山県）、瀬戸焼・常滑焼（現愛知県）、滑石製の石鍋、下駄や箸、漆碗などの木製品が多数出土しました。これらは、その後の調査地点でも多数出土しており、中世の港町に居住した人々の生活用具であったことが分かります。

特に、この調査で出土した、中国元時代の枢府窯製白磁碗は、発掘調査で出土した完形品として、国内でも珍しい一品であり、貴重な文化財です。



白磁碗出土状況

尾道遺跡第5次調査（昭和53年 FE01～04 地点）

尾道遺跡の調査において、最も多くの遺物が出土しています。中国製の青磁・白磁や土師質土器、備前焼、常滑焼、瀬戸焼などの日本各地で作られた土器の他に大量の木製品が出土しています。中でも、写真のように木に墨で字が書かれた木簡や美しい文様が描かれた漆碗・漆皿が見つかっており、当時の生活の様子を知ることができます。

この地点からは、杭列や土止め遺構、土坑などが発見されています。これらは、住居に伴うものというよりは、港湾施設に関連した遺構と考えられます。この調査地点から南側では、これまでに遺構は検出されておらず、海を埋め立てた整地層が広がっています。これらは、江戸時代後期に加登灰屋橋本氏により埋め立てられた新開にあたり、中世には海であったと考えられます。出土遺物から確認された杭列などの年代は、14世紀から15世紀初頭に位置づけられ、この頃には、海が防地口のあたりまで入り込んでいたようです。

これまでの調査によれば、かなり北側まで入り江のように入り込んでいたと考えられ、この調査地点周辺が、港としての機能をもっていました。

防地周辺では、14世紀代にさかのぼる遺物が多数出土しており、その頃の港の中心地であったと考えられます。



杭列



土止め遺構

尾道遺跡第7次調査（昭和54年 FI01～03 地点）

この調査では、備前焼の大甕が8個体並んで出土しました。4個ずつ2列、ほぼ東西方向に並んでおり、甕は下部が土に埋まっていました。甕の底からは、炭化した米や粟が見つかったことから、穀物の貯蔵用の甕であることが分かります。これだけ甕が並んでいることから、穀物を商う商家であった可能性が考えられます。



備前焼大甕出土状況

また、大甕が出土した層のさらに下から、室町時代の海岸線とも考えられる石垣が発見されました。石垣は東西方向に設置され、その南側には、杭列も確認されている。

港の海岸線は、時代によって南下しており、現在の本通り商店街の南側に、中世の海岸線があり、徐々に埋め立てによって、現在の海岸線となったのです。



海岸線の石垣

尾道遺跡第8次調査（昭和55年 KG04~08）

この調査では、7面の生活面が確認され、室町時代から江戸時代にかけて継続して生活が営まれていたことが分かります。また、2層の焼土層が検出され、たびたび火災により建物などが焼失していたことがうかがえます。そのたびに同じ場所に建物を建て直し、町の人々は生活していたのでしょう。こうした火災の痕跡は、他の調査地点との関係を探るうえで、重要な要素であり、港町がたびたび火災にあったことを示すとともに、古文書等の文献資料との比較により、火災の時期を特定する材料ともなります。文献では、元応元年（1319）に備後国守護の長井貞重が郎党ら数百人を尾道浦へ乱入させ、「政所・民家一千余宇」を焼き払ったという記述があります。こうした文献で分かる歴史を裏付ける証拠が、掘り出される日が来るかもしれません。



建物跡

尾道遺跡第12次調査（昭和56年 GB01）

狭い調査区域ながらも、建物の痕跡と区画がよく残っていました。港町は、狭い土地に建物がひしめき合っていることが多いのですが、尾道も例外ではなかったようです。ただし、室町時代には、すでに現在の町並みの骨格が出来上がり、整然と区画されていたようです。建物の柱穴や垣根の跡、道路遺構が確認されています。



建物と区画

尾道遺跡第 20 次調査（昭和 57 年 EI01 地点）

室町時代末頃の建物に伴う基礎工事の痕跡が見つかりました。建物の壁には板材を用い、杭により固定しています。この建物は複数回建て替えられていますが、当時の民家もきちんと整地した上に建てられ、雨水等の対策もとられていたようです。建物の周りには排水溝も掘られていました。



建物の基礎工事跡

尾道遺跡第 33 次調査（昭和 60 年 BG01 地点）

調査では、室町時代の海岸線の砂留めに用いられたと考えられる杭列が発見されました。こうした杭は板を固定するためのものと考えられ、当時の海岸線の様子が分かります。



杭列

尾道遺跡第 35 次調査（昭和 60 年 BJ02 地点）

井戸跡と石列及び杭列を確認しています。この井戸からは、銅鏡が発見されており、何らかの呪術に関係したものであると考えられます。

また、石列と杭列は、海岸線に伴うものであり、室町時代の海岸線を復元する材料となります。



尾道遺跡第 99 次調査（平成 4 年 JO01 地点）

木杭が 27 本と大量に発見されています。ほぼ東西に一定の間隔で、並んでおり、調査地点が海から離れているため、護岸遺構とは考えられませんが、防地川に関連した施設であった可能性があります。



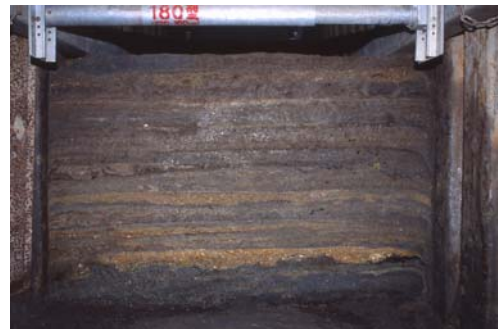
杭列

尾道遺跡第 100 次調査（平成 4 年 BG02 地点）

建物跡と道路状遺構が検出されています。この道路状遺構は現在の本通りと直交しており、いわゆる小路のような通路があった可能性があります。

本通りは旧西国街道であり、近世には官道として整備されますが、中世の段階ですでに道路として、成立していたと考えられます。

これは、第 182・184 次調査（平成 14・15 年）地点でも同様の結果が得られており、中世の段階で港町の主要道路として整備されていたと考えられます。右の写真では、何回にもわたって、道路が整地されている様子が分かります。



道路を何度も整地した跡

以上のように、尾道旧市街地全域で 190 回を超える発掘調査を行い、様々な調査成果が得られています。現在、尾道遺跡で最も古い年代の土器が出土しているのは、防地口交差点周辺です。ここからは、13 世紀から 14 世紀前半の土器がまとまって出土しており、浄土寺や西國寺を後背にもつこの地域が、港町尾道の当時の中心地であったと考えられます。その後、長江や土堂といった地域でも、14 世紀の土器が見つかることから、徐々に西側に拡大していったのでしょう。

現在の旧市街地の原形ともいえる、中世の港町の姿は、少なくとも足利尊氏が尾道を訪れた 14 世紀前半には成立しており、その後、港の発展に伴い、少しずつ埋め立てて平地を増やしていったと考えられます。

こうした尾道遺跡の発掘調査により、少しずつ中世の港町の姿が解明されつつあります。今後も発掘調査により、新しい発見があるかもしれません。

4 港町瀬戸田と生口氏

これまでは、発掘調査を通して、地下に埋蔵された港町尾道の姿をご紹介しました。ここでは、もう一つの代表的な港町である瀬戸田の発展について、触れたいと思います。

瀬戸田港は、生口島北西部、高根島が対岸にひかえ、幅 100m程の瀬戸田水道が航路となっています。このような地形は、港町尾道と同じであり、前面の島により風がさえぎられ、海面が穏やかであること、尾道水道や瀬戸田水道のような幅の狭い場所は、潮の流れが速いものの、船の出入りや航路へのアクセスが容易であることなど、天然の良港としての条件を備えています。

では、現在の瀬戸田港の原形、港町瀬戸田の成立はいつ頃だったのでしょうか。古文書等の資料でも記録があまり残っていないため、はっきりしたことは、まだ分かっていません。また、現在の瀬戸田港周辺の地下には、尾道旧市街地と同じように港町の遺構が埋蔵されていることが考えられますが、発掘調査が行われていないため、港町の成立と発展の過程を解明するには、もう少し時間がかかります。



瀬戸田港周辺



茶臼山城跡

いつ頃港が成立したのかは、分かりませんが、その地形から船の出入りがしやすいなど天然の良港であることから、早くから港ができていたのかもしれない。平安・鎌倉時代の生口島は荘園として、米などを都に送っていたのでしょから、その積出港の役割を果たしていたことも考えられます。

その後、南北朝時代になると、生口島には南朝方の勢力が茶臼山城に立てこもりますが、その勢力を打ち払い、生口島を支配下に治めたのが、小早川氏です。小早川氏は、北朝方として、因島や生口島などの島々の南朝方と戦い、そのまま支配下としています。生口島も南北朝時代に小早川氏の支配下となり、小早川宣平の子、惟平が生口島を治め、生口氏を名乗ります。

これにより、港町瀬戸田も生口氏の支配下となり、茶臼山城を拠点として、港の後背地には、俵崎城を築き、その管理にあたったと考えられます。また、周辺地域や海運を支配するためにも、その立地が非常に良い港であり、海上支配と水軍の発達に大きく貢献しています。その後の小早川水軍となる水軍の原形がこの頃から、できていたのではないのでしょうか。

こうした、生口氏の成立と発展は、港町瀬戸田にも大きな影響を与えます。特に海運業者との関係を望む武家勢力には、港町尾道と同様に寺院に対する寄進が効果的な手段でした。瀬戸田水道を望む潮音山にある向上寺は、応永10年(1403)に仏通寺の末寺として創建されました。国宝三重塔は、永享4年(1432)に建立された細部に禅宗様式が施された美しい塔ですが、その寄進者として、発願者である信元・信昌とともに、生口守平という名前が文書に記されています。また、興福寺や広徳寺、法然寺といった中世に遡る寺院が港周辺に所在しており、生口氏は中世寺院や港町瀬戸田に深く関わり、海運業者との関係を強め、勢力を拡大します。それとともに、港町瀬戸田も周辺地域の拠点的な港として、大きく発展をとげます。

兵庫県神戸市の兵庫港は古くから主要な港として、発展をとげ、港には兵庫北関と兵庫南関といういわゆる関所が置かれていました。港には、瀬戸内海各地からの船が出入りし、尾道や瀬戸田の船も行き来してしていました。港に入港する際には、通行税が取られていましたが、その記録として、『兵庫北関入船納帳』が残っています。

これは、文安2年(1445)に兵庫北関を通過した船舶の記録で、その船の大きさや所属する港名などが記載されており、室町時代の海上交通を探る貴重な資料となっています。この記録によれば、瀬戸田船籍の入港船数は、23回68艘で、瀬戸内海で6番目の多さとなっていて、9番目の尾道より多かったことが分かります。瀬戸田船籍の船、瀬戸田船は生口船とも呼ばれ、生口氏の重要物資の運搬にあたっていたと考えられます。

瀬戸田船が運んでいた品は、そのほとんどが「備後」つまり塩であったことが記録から分かります。その他に米や豆、小麦などの穀物類、金(鉄や銅のこと)、海産物などを多く運んでいたようです。特に多い塩は、中世の時代から、この地域の主要な産物であり、周辺地域から集められた塩とともに、各地に運ばれていたのでしょう。

こうして、港町として発展した瀬戸田は、その後の江戸時代や明治時代に入っても、製塩や海運の中心地として栄え、現在にもその繁栄ぶりを見ることができます。中世に遡る港町として、その町並みや寺院、港の遺構は後世に残すべき貴重な歴史遺産です。



5 港町と中世寺院

港町瀬戸田は、向上寺などの寺院に商人が様々な寄進を行い、商家の町並みとともに発展してきたことは、先に触れました。

では、港町尾道は、中世寺院とどのような関係にあったのでしょうか。

平安時代末期に大田庄の倉敷地に公認されてから、順調に発展を遂げてきた港町尾道に一つの転換期が訪れます。鎌倉時代末期に定証上人により再建された浄土寺に、九州へ向かっていた足利尊氏が訪れます。足利尊氏は、その後九州で勢力を蓄え、大軍を率いて京都に向かう際にも、再び浄土寺を訪れ、和歌を奉納し、戦勝を祈願します。



浄土寺本堂



浄土寺阿弥陀堂・多宝塔

なぜ、足利尊氏は、浄土寺を訪れたのでしょうか。浄土寺が淵信以来、定証上人の再建に至るまで、港町尾道を代表する寺院であったことは、もちろんですが、それだけでなく、実際に浄土寺再建に多くの寄進を行った道蓮・道性のような港町の商人との関係を重視したことが考えられます。港町の商人にとって、海運の安全や商業の発展を祈る信仰対象が寺院であり、商人たちの拠り所ともなっていました。また、商人だけでなく、海運に関わる人々、舵取や漁師などとの関係も重視し、浄土寺を通して、港町尾道を実際に取り仕切っていた人々を味方に引き入れたいと考えていたのではないのでしょうか。

足利尊氏は吉和の漁師たちを水先案内人とし、その礼として、様々な特典が与えられ、それに喜んだ吉和の漁師たちが、踊ったことが吉和太鼓おどりの由来であると伝わっています。



吉和太鼓おどり



伝足利尊氏墓

こうした武家勢力と寺院の関係は西國寺や天寧寺、西郷寺、常称寺などでもみることができます。

西國寺は、行基による開基と伝わる古刹ですが、現在の伽藍は、金堂が至徳3年（1386）に再建され、三重塔は永享年間（1429～1441）に建立されています。西國寺は平安時代の院政期より朝廷との関わりが深く、官寺として大きな影響力を持っていたと考えられます。室町時代に足利将軍家の権力が弱まると、全国各地の守護が力をつけていきますが、備後国の守護であった山名氏も、港町尾道を円滑に管理下に治めるため、西國寺に多くの寄進を行っています。特に明との交易を盛んに行っていた山名氏には、瀬戸内海交易の中心地でもあった尾道は非常に重要な拠点でした。



西國寺金堂



西國寺三重塔

天寧寺は、尾道の商人の発願により、二代将軍足利義詮により伽藍が創建されました。嘉慶2年（1388）には、五重塔も建立され、足利将軍家ゆかりの寺として港町尾道でも大きな影響力をもつようになります。三代将軍足利義満も厳島神社参詣の途中、天寧寺に宿泊しています。また、応永27年（1420）に李氏朝鮮の使節が日本に訪れた際の記録『老松堂日本行録』によれば、寺の敷地も広大で、参道には、商家が多数並び、人々でにぎわっていたようです。

尾道遺跡第9次調査（昭和52年 MQ01～06）では、創建当初の建物の礎石が発見されています。ここからは、多数の瓦も出土しており、大規模な伽藍が建っていたことを物語る貴重な資料です。発見された礎石建物は僧堂（禅堂）であると推定されています。



創建当初の礎石建物跡



出土した瓦

港町尾道には、他の町と異なる大きな特徴があります。それは、時宗寺院が6カ寺所在することです。西郷寺と常称寺は、ともに足利将軍家から庇護を受け、伽藍を建立しています。西郷寺本堂は、文和2年（1353）に建立され、時宗寺院本堂として最古のものです。また、常称寺も暦応3年（1340）に足利尊氏により、七堂伽藍が建立され、その後火災により大部分が焼失しますが、本堂は残り、現在に至ります。室町時代に大門や観音堂も再建され、本堂と一体となった中世の寺院建築は非常に貴重といえます。



西郷寺本堂



常称寺本堂

港町尾道の中世寺院は、このように武家勢力の寄進や庇護を受けて、見事な中世寺院建築により再建・建立されます。しかし、そうした寺院は、尾道商人の信仰をあつめ、多くの寄進により発展したともいえます。瀬戸内海において、港町尾道は武家勢力の直接的な支配が及ばない商人や海運業者の町であり、そうした商人たちの拠り所である寺院との関係を強めることで、足利将軍家や山名氏は尾道を、または瀬戸内海における経済力・海運を手に入れようとしていたのでしょう。